

共観福音書の労働観

The Synoptic View of Labor

楠本史郎*

要旨

福音書には、イエスが労働について語ったり、直接評価する記事は見られない。しかし教会の歴史のなかで、公生涯の開始以前、イエスは大工であったと長く信じられてきた。その唯一の根拠であるマルコ福音書 6:3 を釈義した結果、本文批評の点からもその可能性は高い。さらに共観福音書におけるイエスの発言をその背景に遡って検討すると、イエスが日常の職業労働を軽視していたとは言えない。またイエスの譬話は、労働への強い関心と評価が前提となっている。

キーワード：イエス／労働／共観福音書／譬

はじめに

すでに、עֲבַד「働く、労働する」という語を鍵とし、旧約の労働観について検討した¹⁾。J資料の天地創造物語²⁾では、労働はすでに墮罪以前、人間が創造された時点で神から与えられた使命である³⁾。労働は、神に創造された人間の務め、本質であり、神からの祝福でもある。その点は墮罪後も変わらない。罪に対する神の裁きの結果、人間に労働が課せられたのではない。むしろ墮罪によって、本来は人間の本質的使命であった労働に、無為性などの困難が付随するようになった⁴⁾。

箴言の知者はこれを継承し、労働を、神に従う者が携わるべき務めと見る⁵⁾。たゆまず働く者は神の祝福を受ける⁶⁾。一方で富の持つ危険性に触れつつ⁷⁾、勤労の意義とその結果受け取る神の祝福を説く。おもに個人の倫理が展開される。

預言者はこうした労働観を受け継ぎつつ、さらに社会倫理へと視野を広げる。勤勉でありながら貧困にあえぐ労働者の存在に注目する。社会の土台に潜む根本的問題、社会全体の罪性を見つめ、批判する⁸⁾。同時に、終わりの「主の日」に実現

される社会では、労働が不要になるのではなく、本来の祝福を取り戻すと語る⁹⁾。

旧約はこのように労働を重視している。しかし同時に、あるいはそれ以上に、七日目ごとの安息日を重んじる。安息日は、休息であるとともに、人間が神を礼拝し、神との交わりに与る最も重要な日である¹⁰⁾。安息日は他の6日間の労働の日々を前提とし、この6日間の労働は第7日の安息日を意味あるものとする。

以上の旧約の労働観を、新約、とくにイエスはどうか受け継いでいるのか。イエスは労働者だったのか。世俗的職業や労働者をどのように見、評価しているのか。本稿ではそのことを、共観福音書の記事から探ろうと試みる。

実際には福音書全体のなかで、イエスが労働について直接、言及し、評価している箇所は見られない。そのため、近代以降、イエスの労働観について様々な見解が表明されている。Geoghegan, Arthur¹¹⁾は、①イエスが労働を軽視していたとする者¹²⁾、②労働に対して賛成も反対もせず、無視していたとする者¹³⁾、③労働を尊重していたとする者¹⁴⁾があるという。

本稿では以下の点を検討し、イエスの労働観を探る。

* KUSUMOTO, Shiro
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
キリスト教入門

(1) マルコ福音書 6:3 の叙述を釈義し、イエスが労働者であった可能性を検討する。

(2) 共観福音書におけるイエスの言葉をとおして、イエスが労働をどう評価していたか、探る。

(3) 共観福音書におけるイエスの譬をとおして、イエスの労働観を検討する。

今日、世界経済の停滞にともない、多くの国で失業率が高くなっている。日本もまた同様である。とくに正規雇用の門戸は狭まり、非正規雇用の割合が増大している。そのため人々は、とりあえず何らかの職業を得て生活を成り立たせるということに意識を向けざるをえない。若い人々もまた例外ではない。就職に有利な大学進学を求める傾向が強まり、入学と同時に就職活動の重要性が強調される。多くの大学が、就職のための専門学校化・予備校化することを強いられている。いかに職を得るかが学生の最大の関心となり、大学生活自体が就職活動の中に取り込まれつつある。自分の生き方や、社会における使命を考え、それに基づき、明確な目的意識をもって学ぶ余裕を失っているように見える。広い経験や学びによって人格の基礎を広げ、固めることよりも、資格を取って就職活動を有利に運ぶことが優先されかねない。

一方では、日本社会が長期に亘り維持してきた終身雇用制度が崩れつつある。就職した企業にいつまで勤めることができるのか、保証はない。いつか訪れるだろう配置転換や出向、解雇、転職を覚悟しなければならない。その場合、就職のために習い覚えた小手先の知識や技術は通用しない。絶えず自分を磨き、社会から求められる能力や技術、知識を身につけることが求められる。同時に、深く豊かな人格を形成し、幅広い教養とともに、働く強い意志を持つことが必要である。そのためには、自分の生き方を明確にし、社会における自己の使命を認識することが求められる。なぜ自分はこの仕事をするのかが問われる。その点で、聖書の労働観、とりわけイエスが、働くことをどう見ていたのかを知ることは、意味があると考えられる。

1. イエスは労働者だったのか

福音書は共通して、イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受け、その時点から救い主としての活動を開始したとしている。それ以前については、新約

正典とされた四福音書のなかには、マタイおよびルカ両福音書の特殊資料¹⁵⁾以外に、知る手立てがない。それらの特殊資料もまた、イエスの誕生前後および少年時代の伝承が残るにすぎない。受洗以前のイエスの青年・成人時代をうかがわせる資料はない。唯一、ナザレの人々がイエスを「大工」と語っているマルコ 6:1-6a がある。

1 イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。2 安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろうか。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3 この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。4 イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5 そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6 そして、人々の不信仰に驚かれた。

このうちとくに、3節の「この人は、大工ではないか」という、郷里ナザレの人々の発言に注目する¹⁶⁾。教会の歴史のなかでは、イエスが大工であったことが広く信じられてきた。しかしその根拠はこのマルコ 6:3 のみに限られる。マタイおよびルカ両福音書においては、若干の修正が行われている。さらに、マルコ 6:3a については、異なる文言を伝える写本が多くある。本文批評上の課題がある。さらに異議を唱える証言もある。果たしてナザレの人々の発言は正しいのか。受洗前、イエスは大工、すなわち労働者であったのか。以下でこの箇所を、本文批評を含めて釈義的に検討し、こうした問いに答えるよう試みる。

1) 本文批評の問題

(1) マタイ、ルカ両福音書との比較

以下のギリシア語テキストは、Deutsche Bibelgesellschaft/United Bible Societies *The Greek New Testament Fourth Revised Edition* 1993

による。

①マルコ 6:3a

οὐχ οὗτός ἐστιν ὁ τέκτων, ὁ υἱὸς τῆς
Μαρίας καὶ ἀδελφὸς Ἰακώβου καὶ
Ἰωσήτου καὶ Ἰούδα καὶ Σίμωνος;

「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、
ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか」

②マタイ 13:55

οὐχ οὗτός ἐστιν ὁ τοῦ τέκτονος υἱός;
οὐχ ἡ μήτηρ αὐτοῦ λέγεται Μαριάμ καὶ
οἱ ἀδελφοὶ αὐτοῦ Ἰάκωβος καὶ Ἰωσήφ καὶ
Σίμων καὶ Ἰούδας;

「この人は大工の息子ではないか。母親はマリア
アといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ
ではないか」

③ルカ 4:22b

Οὐχὶ υἱὸς ἐστιν Ἰωσήφ οὗτος;

「この人はヨセフの子ではないか」

上記①をマルコ本来のテキストとすれば、マタイは、イエス自身が大工であったのではなく、大工の息子として生まれたと変えたと見られる。また①の「マリアの息子」という表現は当時、問題をはらんでいた。ユダヤ社会においては父親の名前を出すのが通常であり、母親の息子という表現は、庶子であることを暗に示す侮蔑的表現であったとされる¹⁷⁾。そこでマタイは「母親はマリアアといい」と、微妙に表現を変えた。全体に、読者が受けるだろう衝撃を緩和しようとしている。Taylor, V. は「マタイのテキストには一般にイエスを崇敬する傾向がある」と語っている¹⁸⁾。

ルカは「大工」を削除し、「マリアの息子」を通常の「ヨセフの子」という表現に変えている。読者の衝撃となりうる要因をほとんど排除したと考えられる。

共観福音書を比較した結果、マルコの「この人は大工」が元になって、それをマタイとルカがそれぞれの視点から訂正したと見られる。

(2) 写本の比較

①「この人は大工で、マリアの息子ではないか」

οὐχ οὗτός ἐστιν ὁ τέκτων, ὁ υἱὸς τῆς
Μαρίας;

大文字写本 **N B C D L W Δ Θ** は全て、
また **ℓ¹ 28 157 180 205 597 892 1006 1010 1071 1241**

等、多くの小文字写本がこのように読む。

②「この人は大工の息子、そしてマリアの息子ではないか」

οὐχ οὗτός ἐστιν ὁ τοῦ τέκτονος υἱὸς καὶ
ὁ υἱὸς τῆς Μαρίας;

P⁴⁵ チェスター・ビーティ・パピルス、および少数の小文字写本がこのように読む。この系統は、上記のマタイ並行箇所を読み基本的に合致している。

写本の比較からは、大文字写本の全てと多くの小文字写本が①を支持しており、これがマルコ本来のテキストであったことが推測される。その場合、問題となるのは、P⁴⁵ が②を採っていることである。同写本は紀元3世紀に遡り、現在、手にすることができるなかでは最も古いものである。しかしこれは断片に留まり、書体もまたくずれているとされる¹⁹⁾。

また Bruce M. Metzger *A Textual Commentary On The Greek New Testament* United Bible Societies 1975 は

「全ての大文字写本と多くの小文字写本、および重要な初期の翻訳は、『この人は大工で、マリアの息子ではないか』と読む。こうした、イエスを大工とする叙述に対しては、きわめて初期から反対意見があり、そのため、P⁴⁵ を含むいくつかの証言は、このテキストをマタイ 13:55 に融合させ、『この人は大工の息子、マリアの息子ではないか』と読む。パレスティナの古代シリア語訳は、ὁ τέκτων を削除することで、同じような結果をもたらしている」²⁰⁾

としている。

全ての大文字写本と多くの小文字写本が一致して①を支持している以上、写本を比較した結果、οὗτός ἐστιν ὁ τέκτων「この人は大工」がマルコ本来のテキストであると考えられる。その場合、P⁴⁵ はマタイの並行記事から影響を受けたと思われる。

(3) オリゲネスの証言について

アレクサンドリア学派の代表的な学者であった教父オリゲネス (185 頃 - 254 頃) は、上記の②「大工の息子」を支持している。Taylor, V. は、彼は「教会で読まれる福音書のどこであれ、イエス

が職人として描かれているとは認めていない」²¹⁾と語っている(『ケルスス反駁論』6:36)という。Taylor, V. 自身もまた、これを根拠として P⁴⁵ の読みを支持する。

「最善の結論は、マルコは

ὁ τοῦ τέκτονος υἱός (大工の息子) と書き、初期の写字生がこの読みを ὁ τέκτων (大工) に置き換え、さらに ὁ υἱὸς τῆς Μαρίας (マリアの息子) が加わったとするものである。」²¹⁾

しかしオリゲネスの所論は、純粹に聖書釈義をめぐる議論ではない。「ケルススが『復活』を『生命の木』に関連させて、イエスが木工だったからか、と皮肉っているのに対して、むきになって反論しているもの」²²⁾であると言われる。オリゲネスの意図は聖書解釈ではなく、ケルススの異端的発言に対する反論である。その意味で、彼の発言は写本の異同の評価を覆すまでには至らないと考えられる。

(4) 本文批評の結論

以上より、本文批評上、マルコ 6:3 は本来、οὐχ οὗτός ἐστιν ὁ τέκτων, ὁ υἱὸς τῆς Μαρίας; 「この人は大工で、マリアの息子ではないか」となっていたことはほぼ確実である。マルコ福音書によれば、イエスは、郷里ナザレの人々には大工として知られていた。

2) ΤΕΚΤΩΝについて

マルコ 6:3 において、ナザレの人々はイエスが大工 τέκτων であったと証言している。この語はここと、並行箇所のマタイ 13:55 にしか出ない。τέκτων とは何か。どのような仕事を指すものなのか。

(1) 田川によると、紀元2世紀のギリシア教父であったユスティノスは『トリュフォンとの対話』88:8 において次のように語っているという。「イエスは大工とみなされていた。すなわち、人間の間にいる時は、大工仕事をして働いていた。つまり、鋤や(家畜の)くびきを作っていた」²³⁾。

これによれば、イエスは農機具を製作する職人であった。

(2) Taylor, V. によれば、τέκτων はおもに木工に携わる大工である²⁴⁾。また、石や金属をも扱う職人をも指す。あるいは、大工、建具職人、石

工、鍛冶職人として、建築に必要な作業のほとんどを行う者とも考えられる。Gould, Ezra も同様の見解を示している²⁵⁾。

これによれば、イエスは村における建築者であった。

(3) Nineham, D.E. は、「石や木、あるいは金属を扱う労働者を意味しており、その仕事の詳しい内容はそれぞれの文脈から判断される」²⁶⁾と述べる。この場合は、相当広い職種の職人が含まれることになる。

これによれば、イエスは労働者であるとともに、それ以上に、何かを制作する技術者であった。

(4) まとめ 以上からは、イエスがどのような職業についていたのか、正確に定めることはできない。しかし同郷人の証言によれば、イエスが農機具や家などの建築物を作る労働者であり、石か木、あるいは金属を加工する職人であったと推定される。

3) 6:1-6a の主題との関連で

イエスは τέκτων であった。木工、建築、石工をも兼ねた、建築職人であったのかもしれない。手足を動かし、額に汗して働く職人、また労働者であった。当時の知識人・教養人と異なり、ラビの学校に出席して旧約律法を学んだわけではない²⁷⁾。それゆえに郷里のナザレの人々は、イエスの説教に驚いた。「この人は、このようなことをどこから得たのだらう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か」(2節)。しかしその驚きは、イエスに対する躓きと憤りへと変化する²⁸⁾。『「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。』このように、人々はイエスにつまずいた」(3節)。既知の人物がじつは自分たちの知識の枠を越えた存在であることを認めて受け入れることをしようとする。その感情がイエスに対する蔑みを生む結果となる。

(1) 当該箇所の主題 マルコは、イエスが大工ないし職人であったことを強調しているわけではない。むしろ主題は、郷里 πατρίς であるナザレの人々の、イエスに対する無理解と不信仰である。

6:1-6a における郷里ナザレでの伝道は、1:16

から5:43までのガリラヤ伝道の締めくくりとして位置づけられている。そこでは「弟子たちも従った」(1節)。すなわちイエスはもはや、かつての職人・労働者としての姿で現れたのではない。弟子たちを従えたラビ的な存在、あるいは預言者(4節)として描かれる。それに対する人々の反応は、驚き(2節)であり、侮蔑と憤り(3節abc)であった。その結果、彼らはイエスに躓く(3節d)。イエスが神の子、救い主であることを信じない。そうした、人々の無理解が際立つ。その頑なさは、イエスが「そこでは、…何も奇跡を行うことがおできにならなかった」(5節)という結果を生み出す。人々の不信仰に対するイエスの驚きが表明される(6節a)。郷里伝道は失敗に終わる。人々の無理解と不信仰が強調される。そこでマルコ福音書は、12人の弟子の派遣と伝道(6節b以下)という新しい段階へと移ることになる。

(2) 労働の評価 イエスのかつての職業について語られるのは、ここだけである。しかしそれは、郷里ナザレの人々のイエスに対する躓きを示す否定的な文脈で語られている。イエスが大工、職人であることに人々が固執するのは、イエスが神の子であることを認めまいとするためである。したがってマルコがここで、イエスが大工であったことを積極的に主張しているわけではない。また、イエス自身が、自らの職業を肯定的に認めているのでもない。

しかしそれだけにかえて、マルコが、イエスが大工であったことを否定せず、認めていることは重要である。同郷の人々にとって、受洗前のイエスは大工として旧知の間柄であった。そしてイエス自身もそのことを否定していない。少なくともイエスが職業労働を卑しいことと考えていたとは思われない。イエスが職人、労働者であったことに問題を感じたのは、マタイマルカ、また後の一部の写字生たちであって、マルコでもイエス自身でもなかったのである。

2. イエスの発言に見られる労働に対する評価

福音書におけるイエスの発言には、直接、日常的職業労働を評価したものは見られない。しかしだからといって、イエスが労働に対して冷淡で無関心であった²⁹⁾とは言えない。むしろイエスの

教えには、日常の職業労働を前提とした発言が多く見られる。また、一見すると、職業労働に対して消極的ないし否定的に見える発言についても、その背景を考慮するなら、直ちに労働を否定しているとは言えない。

1) 労働に対する「消極的な」イエスの発言の検討

イエスが日常的職業労働に対して「冷淡」ないし「無関心」であったことを示すと言われる発言を、以下でいくつか取り上げ、検討する。

(1) 弟子の選任

マルコ1:16-20(並行記事マタイ4:18-22、ルカ5:1-11)によれば、イエスは、ガリラヤ湖の漁師であったシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネという2組の兄弟を選び、弟子とした。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(マルコ1:17)と呼びかけている。それに対してシモンとアンデレは「すぐに網を捨てて従った」(18節)。ヤコブ、ヨハネもまた「父ゼベダイと雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った」(20節)。彼らはイエスの弟子となるために職業を放棄したとも見られる³⁰⁾。

しかし第一に、マルコはイエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたことがメシアの時の始まりと捉える。イエスは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1:15)と呼びかけた。救いの決定的段階が訪れた。この終末的な緊張のもとで、イエスと弟子たちは専ら宣教に当たる。召しを受けた弟子たちには、特別な時にふさわしい働きがある。このことは、イエスの直接の弟子ではない人々が日常的労働に従事することを否定するものではない。

第二に、実際には弟子たちがイエスの弟子となった時点で、まったく自身の職業を放棄したのかどうかは疑問である。マルコは、イエスの活動がガリラヤからユダ・エルサレムへと移動していくという枠組のなかでイエスの地上の生涯を描く。そこでは弟子たちは召命以後、イエスと全生活を共にしたように描かれている。しかしGeogheganは「彼らはキリストの公生涯の間にくり返し以前の職業に戻った」³¹⁾としている。彼によれば、「使徒たちは、労働のない生活をするために自分の職業を離れたのではない」³²⁾。弟子

たち自身の場合にも、必ずしもイエスの召命は職業労働の完全な放棄を意味しなかった可能性がある。

第三に、イエスには、当時社会的に有力な支持者たちがあったことがうかがえる。ニコデモ（ヨハネ 3:1-15,7:50-52,19:39）やシモン（マルコ 14:3-9, マタイ 26:6-13, ヨハネ 12:1-8）、ザアカイ（ルカ 19:1-10）、アリマタヤのヨセフ（マルコ 14:42-47、並行記事マタイ 27:57-61・ルカ 23:50-56・ヨハネ 19:38-42）などである。しかしイエスが弟子に選んだのは漁師など労働者が中心である³³⁾。

以上より、イエスが労働を卑しいと考えていた可能性は低いと言わざるをえない。また日常的職業に従事する労働者を遠ざけたとは考えられない。

(2) 神の言葉を聞くことへの招き

イエスは神の国の到来を宣言し、神の言葉を聴くことへと人々を招いた。そのことは、職業労働が低いものと見られていたことを意味するのだろうか。

① マタイにおける山上の説教のなかで、イエスは「あなたがたは地上に富を積んではならない。…富は、天に積みなさい」（マタイ 6:19-20、並行記事ルカ 12:33-34）と述べている。また「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」（マタイ 6:24、並行記事ルカ 16:13）とも述べている。これらは、イエスが、労働によって生活の資を得ることを拒否し、あるいは次元の低いことと見なしていたことを意味するのだろうか。

ここでイエスが問うているのは究極的な選択である。最終的に地上の富を取るのか、それとも天の報いを求めるのかという、終末論的な問いである。これが直ちに、日常的な職業労働の否定を意味しているのではない。問題は、地上にあってなお天の神を見上げて生きるかどうかである。地上の富に人の目は惹きつけられる。しかしそこには究極の救いはない³⁴⁾。職業に従事しつつ、地上の富の限界を弁え、最終的な価値は天の神の許にあると認識することが求められている。

② 「思い悩むな」（マタイ 6:25-34、並行記事ルカ 12:22-34）という発言もまた同じ趣旨である。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り

入れもせず、倉に納めもしない」（26節）とされている。ここには、神は被造物である鳥を養い、花を美しく装う以上に、特別な被造物である人間を保護するという創造論的根拠が見られる。同時に、イエスによって到来しつつある神の国を意識したならば、今なすべきことが示されるという終末論的根拠をも見ることができる³⁵⁾。それゆえに「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」（33節）と語られる。いわば過去の天地創造から見た現在と、将来の終末から見た現在が重ねられている。しかしこの発言は現在の労働の無意味さを語っているのではない。地上で労働に従事しつつ、その現在の生全体が、過去の天地創造の恵みによって支えられ、将来の終末へと向かう希望によって生かされることを告げる。

③ ルカ 10:38-42の「マルタとマリア」の出来事も同様である。イエスは、もてなしに心を奪われるマルタに対して、「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである」（41-42節）と語りかける。ここでイエスがマルタに教えているのは、労働の虚しさではない。イエスの言葉を聴くことを生活の中心に置くことである。

(3) 弟子の条件についての発言

イエスはしばしば、弟子たちや、自分に従う者に対して厳しい条件を付している。イエスに従う道は楽な広い門から入るものではなく、厳しい狭い門から入るものである（マタイ 7:13-14、並行記事ルカ 13:24）。それゆえ、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ 8:34、並行記事マタイ 16:24・ルカ 9:23）と言われる。また、「わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける」（マルコ 10:29-30、並行記事マタイ 19:29・ルカ 18:29-30）とも言われている。

福音書は一致して、十字架の苦難へと進み行くイエスの姿を描く。一方、弟子たちはそのことが理解できない。あくまでもイエスが、ローマを打ち破り、ユダヤの国を立て、その王となるといつ

た、政治的メシアであるという期待を懐き続ける。こうした弟子たちに対して、イエスはあえて弟子の条件について厳しい発言をしている。イエスの弟子であるための覚悟が求められている。

またこうした発言は、福音書が執筆された時代に教会が置かれていた状況にも合致している。教会の伝道の進展とともに、諸宗教との対立やユダヤ教との軋轢が生じる。ローマによる政治的迫害も激しくなる。その状況のなかでイエスに従うには、相当の覚悟が求められる。安定した日常生活を放棄したり、地域共同体や家族のなかで孤立したりすることも珍しくない。イエスの教えは、そうした危機的状況にあってなおイエスの後に従うための決意を求める言葉として、福音書に記されている。それは、危機の時代に、終末的緊張をもって迫ってくる言葉である。それをもって、ある程度平穏な時代における日常的労働を否定するものと受け取ることはできない。

2) 労働に対する「積極的な」イエスの発言と行動

イエスの発言のなかには、前項で見たように、一見すると職業労働に対して消極的に思えるものもある。しかしそれぞれの発言の背景を知るならば、必ずしも日常の労働を否定したり、卑しいとしたりする意図はない。他方、労働を積極的に評価していると思われる発言もある。

(1) 律法の完成者

Geoghegan は「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ 5:17) というイエスの言葉に注目する。旧約は、ギリシア・ローマ世界と異なり、労働を神の祝福として評価している。その旧約律法を完成することがイエスの目的であったのだから、イエスは労働を重んじていた、とする³⁶⁾。これは、Geoghegan 自身が認めているように、沈黙の議論 *e silentio* に基づいており、労働に対するイエスの態度を直接に証明するものではない。間接的な推測というほかはない。イエスの関心は、第一には神の国の宣教であり、労働観ではなかった。しかしマタイにとって、イエスは律法の完成者であったのであり、その旧約律法では労働の意義が認められていたことは事実である。

(2) 安息日規定

共観福音書には、律法の安息日規定に対してイエスが大胆な行動をとったことが記されている。

① イエスはファリサイ派の人々から、弟子たちが食べるために安息日に麦の穂を摘んだことが、律法で禁じられた安息日の労働に当たると、非難されている(マルコ 2:23-28、並行記事マタイ 12:1-8・ルカ 6:1-5)。それに対してイエスは、昔サウルに追われたダビデが聖別されたパンを食べた故事(サムエル上 21:1-7)を取り上げ、「安息日は、人のために定められた」(マルコ 2:27)と弟子たちを弁護している。人が生活の糧を得るための労働は卑しいものではない。律法の安息日規定の下位にあるものでもない。

② またイエス自身が安息日に、手の萎えた人を癒している(マルコ 3:1-6、並行記事マタイ 12:9-14・ルカ 6:6-11)。このこともまた、安息日に禁じられた治療行為、すなわち医療労働であるとして人々の非難を受ける。これに対してイエスは「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」と鋭く問いかけ(4節)、反対を封じる。人を救うための労働行為を正当なものとして、あえて安息日にも行った。ここにも、イエスが労働を重んじ、時には安息日律法に対する一般的な理解を越えて重んじたことがうかがわれる。

(3) 働く者の報酬

イエスは72人を伝道に派遣するに当たり、指示を行い、そのなかで「働く者が報酬を受けるのは当然だ」(ルカ 10:7)と語っている³⁷⁾。この発言は、労働には必ず物質的な報いがあることを認めたものである。もちろんここで話題になっているのは一般的な職業労働ではない。派遣される72人が宣教の働きの「対価」として、宿泊と食事を受けることを指している。しかし労働の結果、報酬を受けることから類比して、伝道者の報酬に言及している。つまり、労働者がその働きの報酬という形で正当に認められ、評価されることを前提としている。イエスが、労働と物質的報酬との関係を認めていたからこそなされた発言である。

(4) 仕える者、僕

しかしイエスはたんに世俗的職業労働によって報酬を得ることを、無条件に賞賛したわけではな

い。そこでの働きの質を問う。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」(マルコ 10:43-44、並行記事マタイ 20:26-27)と語る。「僕」δοῦλος は奴隷とも訳される。奴隷は主人に「仕える者」διάκονος である。イエスの要求は、自身に従う者が「皆」πᾶς つまり「全ての人々」に奴隷として仕えることである。それが、最も偉く最上位にあることを志す者の道である。「ここに神の国の逆説がある」³⁸⁾。その逆説的真理を担保するのが、模範としてのイエス自身の姿である。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(45節)。

イエスは労働を重んじ、働く者がふさわしい報酬を得ることを認める。しかしたんに報酬を得ることが働きの最終目的ではない。それは、全ての人々に僕として仕え、自分を与え尽したイエスに従うことなのである。

3) 以上の検討から、イエスの言葉には、日常の労働を軽んじたり、無視したりする要素は見られない。日々の働きの重要性を認めた上で、さまざまな形で福音を語っていると言える。

3. 共観福音書の譬に見るイエスの労働観

イエスが日常の職業労働を直接に評価した言葉は、福音書には存在しない。福音書の書かれた第一の目的は、イエスが神の子、救い主であると伝えることである。ナザレのイエスが神の子であり、キリスト、メシアである。そのイエスは、十字架に付けられ、殺された苦難のメシアである。しかし十字架の死の三日後に復活した救い主である。これら、いわば霊的な真理を宣言し、人々がイエスをキリストと信じるために福音書は書かれた。それゆえそこにはイエスが労働者であったのか、労働をどう見ていたのかを直接示す資料は存在しない。

しかし一方で福音書においては、イエスは人間となった神の子である。そのことの一部が、イエスが大工 τέκτων であったというマルコ 6:3 の証言にも見られる。またイエスの教えには、日常の職業労働を明確に否定する言葉はない。むしろ地上での労働を前提として教えが語られている。

こうしたイエスの態度は、その譬話にも見られる。そこで以下では、第一に共観福音書のイエスの譬話を取り上げ、その素材と登場人物を確認する。次にいくつかの譬話を検討し、そこに現れたイエスの労働に対する見方を探る。

1) 譬話の素材と登場人物の確認

共観福音書のなかでイエスは多くの譬話を語っている。ここでは、その全てがイエス自身に帰されるのかどうかはひとまず置き、現行の共観福音書に記された譬話 36 話を取り上げる。それぞれの素材と登場人物、とくに主人公を分類する(表 1³⁹⁾)。

① 素材と登場人物の分析 表 1 によれば、A の農業・漁業に関する譬話は 11 話あり、全 36 話のうち 31% を占める。その主人公は、農夫、農園主人、農園主人と息子・農夫・労働者・園丁であり、また漁師である。B の生活に関する譬話は 12 話、33% であり、建築者、家庭人、主婦、王と家来、花婿とおとめ、旅人とサマリア人、家の主人と友人、金持ちと物乞い、やもめと裁判官、フェアサイ派と徴税人などが登場する。C の商売・金銭関係は 8 話、22% であり、そこでの登場人物は生活者、商人、主人と僕、金貸しと負債者、主人と管理人などである。D の家族関係・主従関係については 12 話、33% であり、農園主人と息子・農夫、主人と管理人、王と僕などが登場する⁴⁰⁾。

これらの登場人物を見ると、日常の職業労働、また労働者が取り上げられているのは、上記 A の農業・漁業に関する譬話 11 話のほかにも、B に分類された建築者(マタイ 7:24-27)、D に分類された家内労働者としての管理人(ルカ 12:42-48、16:1-8) および僕(ルカ 12:35-40、17:7-10) の 5 話が加わる。譬話全体で 36 話のうち、半数弱 44% の 16 話が、日常的な職業労働に従事する人々を素材としている。イエスがこれら庶民に日常的に触れ、その仕事を理解していたことが知られる。

② しかもこれら 16 話では、素材の労働内容が詳細に描かれている。例えば「種を蒔く人」の譬(表 1 の No.4) では、種が蒔かれ、道端や石地、茨の中に落ちたと語られている。こうした表現は、この地における農耕の実態についての知識や経験を前提とする⁴¹⁾。「からし種」の譬(No.7)

表1 共観福音書のイエスの譬で用いられた素材の分類

A 農業・漁業、B 生活、C 商売・金銭関係、D 家族関係・主従関係						
	名称	マタイ	マルコ	ルカ	主人公	分類
1	家と土台	7:24-27		6:47-49	建築者	B
2	新しい布切れと古い服	9:16	2:21	5:36	生活者	B
3	新しいぶどう酒と古い革袋	9:17	2:22	5:37-38	生活者	B
4	種を蒔く人	13:3-8	4:3-8	8:5-8	農夫	A
5	毒麦	13:24-30			農園主人と農夫	A
6	ともし火と秤		4:21-25	8:16-18	生活者	B
7	からし種とパン種	13:31-33	(4:30-32)	13:18-21	農夫、主婦	A、B
8	畑に隠された宝	13:44			生活者	C
9	良い真珠	13:45-46			商人	C
10	魚を集める網	13:47-48			漁師	A
11	迷い出た羊	18:12-13		15:4-6	羊飼い	A
12	仲間を赦さない家来	18:23-34			王と家来	C
13	ぶどう園の労働者	20:1-16			農園主人と労働者	A、C
14	二人の息子	21:28-32			農園主人と息子	A、D
15	ぶどう園と農夫	21:33-41	12:1-9	20:9-16	農園主人と農夫	A、D
16	婚宴	22:2-14			王と家来	B
17	十人のおとめ	25:1-13			花婿とおとめたち	B
18	タラントン	25:14-30		(19:12-27)	主人と僕	C、D
19	すべての民族を裁く	25:31-46			王と家来	D
20	金を借りた二人			7:41-43	金貸しと負債者	C
21	善いサマリア人			10:30-37	旅人とサマリア人	B
22	真夜中の訪問者			11:5-8	家の主人と友人	B
23	愚かな金持ち			12:16-21	農園の主人	A
24	目を覚ましている僕			12:35-40	主人と僕	D
25	忠実で賢い管理人			12:42-48	主人と管理人	D
26	実のならないいちじくの木			13:6-9	農園主と園丁	A
27	客と招待する者への教訓			14:7-14	婚宴の客	D
28	大宴会			14:16-24	主人と客	D
29	費用の計算			14:26-33	建設者と王	C
30	無くした銀貨			15:8-10	主婦	D
31	放蕩息子			15:11-32	農園主と息子	A、D
32	不正な管理人			16:1-8	主人と管理人	C、D
33	金持ちとラザロ			16:19-31	金持ちと物乞い	B
34	主人に仕える僕			17:7-10	農園主と僕	D
35	やもめと裁判官			18:2-5	やもめと裁判官	B
36	ファリサイ派の人と徴税人			18:10-14	徴税人	B
37	(ムナ)	(25:14-30)		19:12-27	王と僕	C、D

A 農業・漁業=11話 (31%)

B 生活=12話 (33%)

C 商売・金銭関係=8話 (22%)

D 家族関係・主従関係=12話 (33%)

二重線の枠内は、登場人物が職業的労働者であることを示す

では、種の小ささと草丈大きさについての知識が元になっている。「毒麦」の譬 (No.5) は、農業者にとって毒麦がいかに厄介な存在であったかを理解したうえで話されたものである。これらは、少なくとも農耕に関心ある者でなければ表現しえない。牧畜に関しても同様である。「迷い出た羊」の譬 (No.11) は、羊飼いが百匹程度の群れを単

位として放牧すること、羊が群れからはぐれやすいことなど、放牧労働の現実を知っていなければ語ることができない。また「ぶどう園の労働者」の譬 (No.13) は、ぶどう収穫時期の農園の実態、そこで働く労働者の雇用形態に通じていてこそ、語ることができる。漁業について知識も同様である。「魚を集める網」の譬 (No.10) は、獲った魚

の処理方法など、当時の漁業の業務を知っていなければ話すことができない。またイエスは、家業を取り仕切る管理人の実態や、その主人との関係などにも詳しい (No.25、No.32)。

③ これらの譬話は、庶民の生活と仕事についての広い知識と関心がなければ成り立たない。イエスが世俗的職業労働に従事する人々と親しかつたことが予想される。しかもそれらの人々の大半は、当時、貧しい階層に属していた。こうした庶民に親近感を懐き、彼らの日常的な労働に深い関心を寄せていたからこそ、豊富な譬話を語ることができた。しかも、これら譬話のなかには、働く者に対して、労働それ自体に対して、軽蔑的な要素は見られない。

2) 労働の評価に関わる譬話の検討

共観福音書におけるイエスの譬話のなかでも、とくに労働の重要性を前提としていると思われるものをいくつか取り上げ、検討する。

①「家と土台」の譬 (No.1) 岩の上に家を建てた賢い建築者と、砂の上に家を建てた愚かな建築者が対比されている。ここではイエスの言葉を聞いて行うことが強調され、賢い建築者に重ねられている。それが最後の審判に耐えうる唯一の道である⁴²⁾。この譬の前提として、岩を土台とし、労苦して家を建てる建築者の労働が高く評価されていることは言うまでもない。イエスはこうした質の高い労働を評価したうえで、譬を語っている。

②「迷い出た羊」の譬 (No.11) 百匹の羊を飼う羊飼いが、迷った一匹を捜し求める。任務に忠実に働く羊飼いの姿が、罪人の悔い改めを求め、喜び迎える神の愛に譬えられている⁴³⁾。一匹を探し出す羊飼いの労働と熱心が、一人の罪人の救いを願い求める神の救いの行動と熱心を示す。熱意ある労働者が、愛の神の本質を指し示している。ここでも羊飼いの熱心な労働が評価されている。

③「タラントン」の譬 (No.19) 主人の留守中タラントンを預かり、それを元手に商売をしてもうけた二人の僕が、帰宅した主人からほめられる。「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」(マタイ 25:21・23)。一方、預かったものを穴に隠しておいた僕は、主人から「怠け者の悪い僕だ」(同 25:26) と

の叱責を受ける⁴⁴⁾。ここでは、多少にかかわらず、与えられた能力を神のために最大限に用いて働くことが賞賛されている。この評価は日常的職業労働だけに限定されてはいないが、それを含み、神のためのさまざまな働きが勧められている。

④「目を覚ましている僕」の譬 (No.24) と「忠実で賢い管理人」の譬 (No.25) 家の主人が留守の間にも職務に忠実に働く僕と管理人が、突然帰ってきた主人にほめられるという話が素材になっている。現在、与えられた使命に忠実な信仰者が、世の終わりに再臨するイエスに喜ばれ、祝福されると語られる。終末時の祝福を受けるために、日常の忠実な働きぶりが重要とされる。ここでも通常の労働の大切さが前提されている。

⑤「不正な管理人」の譬 (No.32) 主人の財産を浪費した管理人が主人に解雇を申し渡され、保身のためにさらに不正を繰り返す。不正な管理人の必死さが主人からほめられる (ルカ 16:8)。しかしここでほめられているのは、管理人の行った不正行為そのものではない。主人の裁きを前に、不正を行ってでも救いを求める熱心が評価されている⁴⁵⁾。正当な労働が軽視されているのではない。職務に忠実に励む労働を良しとしつつ、そこからはみ出た者であっても、必死に求めるならば、神は祝福を与えるという趣旨である。この譬においても、労働の意味は減じられていない。

3) イエスの譬話は、地上における労働の意義を直接に主張するものではない。むしろ地上の出来事を素材に、天の出来事を語る。神の国、神の姿を教える。しかしその素材の半数弱は、日常的労働に関係している。主人公および登場人物もまた、農夫や漁師、農園主人、僕や管理人といった、働く人々が多数を占める。そこには労働する庶民の姿がそのまま映し出される。日常的な職業労働を卑しいものとする要素は見当たらない。

おわりに

キリスト教世界においても、必ずしも、その歴史の初めから職業労働が重んじられてきたわけではない。とくに古カトリック期に教会の職制の基礎が定まり、以後、中世期に教職と信徒との分離が決定的に固定されていくとともに、世俗の労働は聖職より下位に置かれるようになっていく。キ

リスト教信仰の基準である聖書の解釈においても、世俗的労働の意味は軽んじられた。

しかし本来、旧約において労働は、神が人間に与えた本質であり祝福である。新約もまた基本的にこれを受け継いでいる。マルコ福音書によれば、救い主としての活動を始める前にはイエスは「大工」、労働者であった。その教えにおいても、また譬においても、労働を軽視する要素は存在しない。たしかに福音書は、神の子、救い主としてのイエスの姿を中心に描いている。その受難と死、復活を中心としており、世俗的職業労働について直接言及してはいない。むしろイエスの到来とともに神の国はすでに来ており、終末的緊張の高まりのなかで、「霊的」真理を中心に語る。しかしその全体は、日常の職業労働を重んじる旧約の労働観を前提としている。

イエス自身、かつて労働者であった⁴⁶⁾。共観福音書におけるその教えと譬は、人々に神の国の到来を告げ、イエス自身を神の子、救い主と信じる信仰へと招いている。しかし同時にそこには、日常的な職業労働に励む人々に対する理解と共感が見られる。だからこそイエスの宣教は人々の心に強く訴えかけたと考えられる。

今日、職業労働は何よりも生計を立てるための手段と見られている。より有利な条件の職場へ移ることが当然の志向であり、行動であるとされる。しかしイエス自身が労働者であったし、その教えには、働く者への共感と親しみが込められている。そこでは、労働は、たんなる生きる手段以上の意味を持っている。聖書の労働観に立ち返り、改めて働くことの意義を確認したい。

<注>

- 1 楠本 史郎「旧約の労働観 עֲבָדָה をめぐって」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第2号 第2分冊 2009年 1頁以下
- 2 創世記2:4 b以下
- 3 とくに創世記2:15。ここで עֲבָדָה が用いられ、「耕す」と訳されている。すなわち人は墮罪以前、楽園ですでに、労働し、神の創造した世界を管理することが期待されている。
- 4 創世記3:18 - 19 楽園での労働は直ちに神の祝福であった。しかし墮罪後は労働が「茨とあざみ」を伴う労苦となる可能性が示唆されている。
- 5 箴言10:4 - 5、12:24 など
- 6 箴言10:16、12:27 など

- 7 箴言10:22、11:28、15:16 - 17、30:8 - 9 など。
- 8 アモス書2:6、8:4 - 6 など。
- 9 アモス書9:13 - 14、エレミヤ書9 - 15 など。
- 10 出エジプト記20:9、レビ記23:3、申命記5:14 など。
- 11 Geoghegan, Arthur *The Attitude Towards Labor In Early Christianity And Ancient Culture* 1943 pp.93 -
- 12 「キリストは労働を軽蔑していた」Renan, E. *Vie de Jesus* p.164 Paris 1864。「この世での命にとって必然なのは神に対する絶対的依存であり、それは『個人の努力と労働』に反するものである」Salter, W. *Die Religion der Moral* S.117 Berlin,1885 Geoghegan,op.cit p.93による。
- 13 Tilgher, A. *Le Travail* p.21 - 22 Paris 1931 Geoghegan,op.cit p.93による
- 14 彼は「彼の王国での労働を神の国の徴また特徴に関わるものへと高めた」Schumacher, H. *The Social Message of the New Testament* p.102 Milwaukee,1937。彼は「全ての人にとって模範となる労働者として地上に来られた」Anon *Christ the Worker* p.87 Blackfriars 1927。Geoghegan,op.cit p.93による。なおGeogheganは他に、Weber, S. や Hauek, F. もこの立場に立つとしている。
- 15 マタイ2:18 - 2:23、ルカ1:5 - 2:52
- 16 『新共同訳聖書』(1990年)による。『口語訳聖書』(1954年)、『新改訳聖書第三版』(2003年)もまた同様に訳している。
- 17 Gould, Ezra は、「ヨセフ(の名)が物語から落ちているのは多分、イエスの宣教が始まる前に彼が亡くなっていたことを示すのだろう」(*The International Critical Commentary Gospel According To St. Mark* 1975 p.104)と言う。しかしTaylor, Vincent は『『マリアの息子』』という句は福音書にも手紙にも並行箇所がなく、困難な歴史的問いを引き起こす。父親が死去している場合でも、侮辱的語法(士師9:1f.)の他は、男性を母親の息子と記すのはユダヤ人の習慣に反する。マルコが処女マリア伝承を知っていたとは思えない。ましてナザレの人々が知っていたとは更に考えにくい」(*The Gospel According To St. Mark*, 2nd edition 1966 p.300)と述べている。「マリアの息子」は、イエスに対する侮蔑的な表現と見るべきだろう。
- 18 Taylor, Vincent op.cit p.300
- 19 田川建三『現代新約注解全書 マルコ福音書 上巻』1972年 385頁
- 20 Metzger, Bruce M. *A Textual Commentary On The Greek New Testament* United Bible Societies 1975 pp.88
- 21 Taylor, Vincent op.cit p.300
- 22 田川、同書、386頁。Metzger, Bruce もまた次のように記している。「(イエスを大工とすることに対する反対の一例として) 2世紀のキリスト教の敵対者ケルススは、新しい宗教の創始者の『商売は大工』にすぎないではないかと、嘲笑して述べている。この愚弄に対してオリゲネスは『教会に知られている福音書のどこにも、イエス自身のことを大工とは書いていない』(『ケルスス反駁論』6:34,36)と語り、反論しようとした。これは、オリゲネスがマルコ6:3を思い出さなかったか、それとも彼の知っていた写本のこの節のテキストがすでにマタイの並行箇所と同じものに変えられていたか、のどちらかであったためだろう。」(op.cit

- pp.88 - 89)
- 23 田川、同書、386頁。また Schweitzer, Eduard *Das Neue Testament Deutsch Das Evangelium Nach Markus* 1975 高橋 三郎訳 1976 167頁 もまた同様の見解。
- 24 Taylor, Vincent op.cit p.300
- 25 Gould, Ezra op.cit p.104
- 26 Nineham, D.E. *The Pelican New Testament Commentaries Saint Mark* 1975 p.165
- 27 M.J.Lagrange *Evangile selon Saint Matthieu*, 1927 p.69 Geoghegan, op.cit p.95 による。
- 28 Taylor, Vincent は、「2節の驚きは、続く3節の憤りによっては説明できない。ルカ 4:23 - 27 のような説教が前提されているのだろうか」と述べ、イエスの説教が、ナザレの人々にとって到底受け入れがたい、敵対的な内容であったと想定する。op.cit p.298 しかし敢えて敵対的な説教ではなくても、語る者が聞き手にとって既知の人物であるからこそ、その人の持つ能力や可能性を受け入れず、かえってそれを拒否することは十分ありうる。「イエス自身についての問いが発せられるのだが、… この問いは〔信仰に到達するまで〕問い続けられることなく、人々は先走った解答をこれに与えて、簡単にイエスを既知の範疇の中に組み入れてしまった」。Schweitzer, E. op.cit 166頁
- 29 Kautsky, K. 「イエスは労働について何も語らず、軽蔑していた」*Der Ursprung des Christentums* 1910 chap.4, 1c. Hauck, H. (*Die Stellung etc.* S.64) も同様。Geoghegan, op.cit p.97 による。
- 30 Schweitzer, E は、イエスの「『御後に従う』という言葉は、イエスの口から出るとき、一つの新しい響きを獲得したのであり、この響きは、このほかには、人はバアルの後かヤハウェの後か、いずれかに従うことしかできないということ語っている旧約聖書の箇所(列王上 18:21. そのほか箴言 7:22 も参照) にしか見られないものである」と語り、イエスの弟子となることが世俗の職業労働からの完全な離脱を意味すると強調している。op.cit 57頁
- 31 Geoghegan, A. はその例として、ルカ 5:2 - 11、ヨハネ 21:2 - 8 をあげている。op.cit p.101
- 32 Geoghegan, A. op.cit p.101
- 33 「労働に対するキリストの好意的態度は、彼が仲間を選んだ仕方に現れている。… 彼は明らかに労働者たちを好んだ。… 彼らは、キケロが『名誉なき最下層の職業人たち』(Cifero *De offic.* 1,42) と位置づけた職業に従事する人々たちだった」Geoghegan, A. op.cit p.96
- 34 ルカ 12:13 - 21 の「愚かな金持ち」の譬も同様の趣旨。
- 35 橋本滋男、『新共同訳 新約聖書注解 I』1991年、64頁
- 36 Geoghegan, A. op.cit pp.97 - 98
- 37 同様の言葉がマタイ 10:10 にも記されているが、ここでは、働く者が受けるべきものは報酬ではなく、食べ物となっている。
- 38 Gould, Ezra op.cit p.202
- 39 No.1 ~ No.19 まではマタイ福音書の順序に従い、No.20 ~ No.37 はルカ福音書にのみ記されたものであり、同福音書の順に従って記載した。ただしイエスの言葉のうち、どれを譬とするかはさまざまな見解がある。「トレンチは30の譬を数え、ブルースは33の譬に8つの『譬の胚種』を加え、ユーリッヘルは53、B.T.D. スミスは62の譬を認めている。わたしたち自身は『約60』としたい」Hunter, A.M. *Interpreting the Parables* 1960 高柳伊三郎・川島貞雄訳 1962 11頁
- 40 複数の領域にまたがるものも含まれる。
- 41 Jeremias, J. は、マルコ 4:3 - 8 の種蒔く人の譬では、題材がパレスティナの日常生活から取り出され、この地特有の耕作方法が熟知されていると指摘している。「なぜ彼が路上に種を播くかの理由が分かる。彼は承知の上で路上に種を播く。その路は、村人たちが刈り取ったあとの畑を踏みつけて作ったものに違はなく、やがていっしょにたがやされるはずのものだからである。種播く人はわざと、休閒地で種を枯らしてしまういばらの間に種を播く。いばらもいっしょにたがやされてしまうことになっているからである。… 西洋人にとっては拙劣と思われることが、パレスチナの事情にとっては通例であることが分かる。」Jeremias, Joachim *Die Gleichnisse Jesu* 1966 善野碩之助訳 1979 3 - 4頁。Hunter, op.cit. 18頁も同様。
- 42 Jeremias, J., op.cit. 212頁
- 43 マタイ 18:12 - 13 では、ルカ 15:4 - 6 のようにイエスの敵対者であるファリサイ派に対してではなく、弟子たちに対して語られている。ルカはこの譬によって、イエスの敵対者が拒絶した徴税人や罪人たちの悔い改めを受け入れる神の愛を語る。これに対してマタイは、弟子たちおよび教会が小さな者を受け入れるべきであることを語る。おそらくマタイはQ資料を変更し、聞き手を弟子とすることによって、自らの視点から、教会への教えとしたのだろう。しかしいずれも素材は、羊飼いの忠実な仕事ぶりである。Jeremias, J., op.cit. 34 - 35頁
- 44 Hunter, A.M. は、タラントンの譬におけるマタイとルカの編集時による意図と、イエス自身の意図とを区別する。前者は、キリストの再臨直前にある教会の生き方を示すことにある。後者は、「神から与えられた光(律法)を死蔵し、人類のためのものを独占した、敬虔なパリサイ人を」批判することにあるという。Hunter, op.cit. 128頁
- 45 「『喜ばしい将来を招くためには、決然として現在を利用することが前提条件である』というのが、不正な支配人の譬の合言葉である」Jeremias, J., op.cit. 8頁 ここでは、この管理人の行動が正しいかどうかは問われていない。追い詰められてもなおあきらめず、道を開こうとする意志が譬の素材である。
- 46 Geoghegan は、ストア派のアリストテレス的人間観に基づく労働観や、フィロンにおける創造論に基づく労働観を不完全なものとし、「肉体労働は、ただ生ける神の子キリストが労働されたという事実によってだけ聖なる性格を受け」と語っている。op.cit p.104